



# ありがとう、せつ子さん

〈栃木県〉

加藤 慶子 かとう けいこ 58歳

34年前の話です。私は第一子を妊娠中、切迫流産の恐れがあり、約2カ月間、産婦人科病院に入院しました。そこで担当の看護婦さん、せつ子さんに出会いました。私は絶対安静という状況で、せつ子さんは、毎日、私の体を拭いてくれたり、ベッドの上で寝たままの私の髪を洗ってくれたりしました。不安な心でふさぎ込みがちだった私のために元気の出るような本をプレゼントするなど、それはそれは、献身的な看護をしてくださいました。

それでも病状は好転することはなく、お医者さまから、「今回は、諦めましょう。次に期待ですね」と、言われました。私は号泣してしまいました。初めて授かった赤ちゃんなので、どうしても産みたいと思っていたからです。私は

悲しくなっていて、ただただ泣いてばかりの日々を暮らしていました。

掻爬手術そうはの日程が言いわたされ、私は祈るよりほかになすすべがありませんでした。

手術日の朝、一睡もせずに、祈っていた私の姿を見て、せつ子さんが先生に掛け合ってくださいました。

「せめて、もう1日だけ、待ってあげてください。患者さんが納得する時間を与えてあげてください」

先生は待ってくださいました。すると、どうでしょう。その晩に、出血がピタリと止まりました。翌日の超音波検査では、心臓が動いていることが確認されました。まさに奇跡です。

やがて、私は元気な女の児を無事出産することができました。せつ子さんは

命の恩人です。今では病院は取り壊され、全ては思い出の中の出来事になってしまいました。感謝の気持ちは今もなお私の心に宿っています。

この時産まれた娘は、小学生2人のお母さんとなり、今も元気で幸せに暮らしております。

「せつ子さん、ありがとう」